

写真投影法を用いた小石原焼の里の文化的景観の分析

九州産業大学工学部 学生員 豊岡広平
九州産業大学工学部 学生員 濱田英里
九州産業大学景観研究センター 丸谷耕太
九州産業大学工学部 正員 山下三平

1. はじめに

1-1 背景

民芸運動で注目された小石原焼の里である福岡県朝倉郡東峰村には、いまでも陶芸に特有な景観が残され、訪れる人々を魅了している。このような文化的景観の様相を分析し、具体的な保全の課題を整理・更新することが望まれる。文化的景観は「生きた景観」であり、変化を前提とする移ろいやすいものだからである。

文化的景観においては人と自然との相互作用が重視される。このため地域に暮らす人々の眼を通した、それを「投影」した景観表象の把握がとくに重要である。

1-2 目的

本研究では民芸運動で広く知られるようになった、小石原焼の里(小石原皿山地区)を取り上げる。皿山の窯元と家族を中心に、地元の眼を通してこの窯業の里の文化的景観の表象を把握し、それに対する評価を明らかにすることを目的とする。

2. 調査方法

本研究は「写真投影法¹⁾」を用いる。この方法によれば、住民の環境世界の表象を直接把握できる。また同時に、その表象に投影された住民の心的世界を把握することが可能となる。

調査対象地域は福岡県朝倉郡東峰村小石原地区である(図-1)。東峰村は2005年3月28日に旧小石原村と旧宝珠山村が合併して発足した自治体で、面積51.93km²、人口2,413人(2013年11月末日現在)である²⁾。皿山地区は小石原焼発祥の地で日用雑器を中心とした窯業が盛んに行われている。また、かつて山岳信仰を行っていた修験者に由来する「行者杉」が林立する。



被験者は東峰村小石原地区皿山の住民である。彼らにデジタルカメラを渡し、小石原皿山地区を自由に撮ってもらった(30名中26名の有効回答)。住民属性の構成と撮影枚数を表-1に示す。各画像の撮影時に撮影対象物とコメントを筆記により記録してもらった。

調査期間は2013年3月4日から3月11日までとした。得られた撮影枚数は858枚であった。

表-1 被験者の属性の構成

性別		出身地			
男	女	小石原		小石原外	
35%	62%	54%		42%	
年齢					
10代	20代	30代	40代	50代～	
11.5%	7.7%	15.4%	26.9%	34.6%	
住居開始時期					
1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代
35%	62%	4%	31%	23%	15%
					※ 不明は除く

※不明は除く

3. 結果

3-1 主対象、主対象と評価

得られた映像を構成する要素を、撮影対象物およびコメントの記録をもとに、38種の主対象に分類した(図-2)。また、コメントに含まれる評価を「肯定的」、「評価なし」、「否定的」に分類した(図-3)。

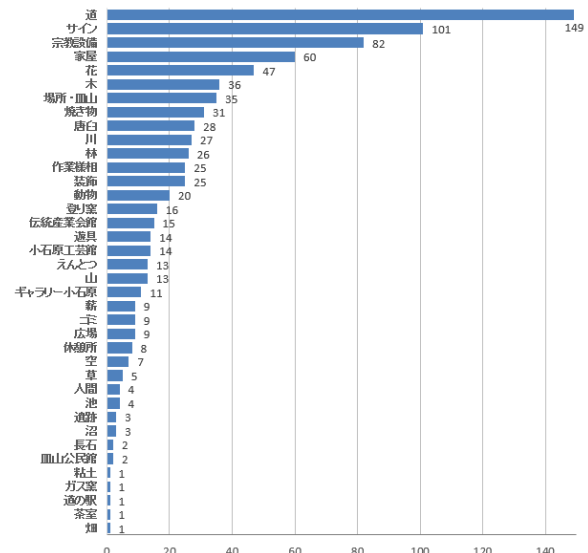


図-2 主対象の分布度数

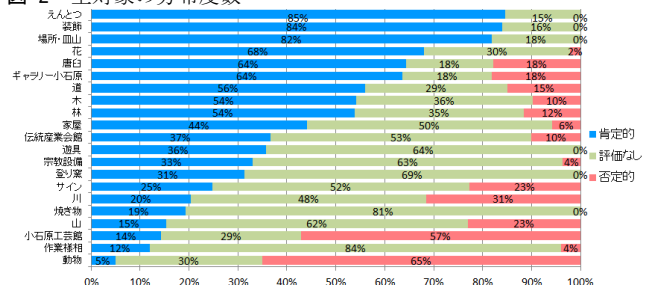


図-3 主対象と評価

主対象として最も多いのは「道(149 件)」で、2 番目は「サイン(101 件)」である。陶芸の里として小石原で焼き物を売ること意識しているため、外部から来るための手段に対して関心が高い結果と思われる。また、「サイン」に肯定的な意見と同程度の否定的な意見が見られる。このことは、現状の外部の人々の誘導に関して地元にも不満があることを示している(図-4)。「宗教設備(82 件)」が 3 番目に多く、窯業で使用される自然を祀るために作られたものが信仰され続けていると考えられる。また、行者堂や香水池といった英彦山の修験道、役の行者ゆかりの事跡の撮影が多く、地域の人々の心性と深く関わりがあることが推察される。

ところで小石原以外の窯業地では域内販売が少ない傾向にあり³⁾、域内販売の多さが小石原の特徴である。4 位の「家屋(60 件)」は焼き物が販売される場所でもあり、意識されやすいものと考えられる。

「場所・皿山」に対する肯定的な意見が多い(82%)。住民の皿山地域に対する愛着の高さをうかがわせる。一方、地域全体を映した景観は文化的景観の全体像を表すものの、必ずしもそこに景観的な特徴が表れていない(図-5)。総体としての文化的景観、場の景観としての文化的景観の把握の困難がここにある。

「花」、「木」、「林」等の自然の要素に対して肯定的な評価が多く(>50%)、自然環境が地域の人々に重視されていることがわかる。しかし、川だけは否定が肯定を上回っている(31%/20%)。コメントを見ると、昔と比べて水量が減ったことや、唐臼がなくなってしまったことが残念であるという内容が多い。

「動物」に対しては、否定的なコメントが多く(65%)、鹿の被害に悩まされている現状が映し出されている。

3-2 主対象と属性

つぎに、主対象と被験者属性との関係を検討する。

性別については、「宗教設備」と「焼き物」の頻度が



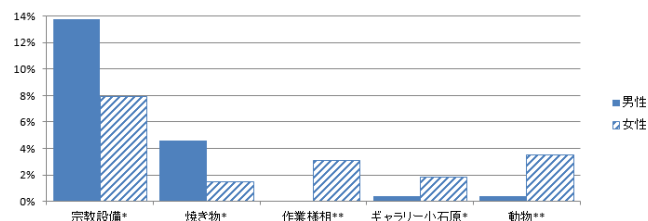
コメント：よごれていて見る気がしない。

図-4 主対象：サインの例
評価：否定的



コメント：ここから見る皿山はほっとする。

図-5 主対象：場所・皿山の例
評価：肯定的

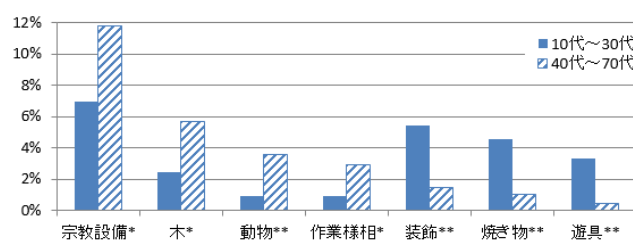


$p < 5\%$ ** $p < 1\%$

図-6 主対象と性別

男性の方が女性より多い(図-6： $p < 5\%$)。作陶が男性の仕事である傾向があるためと思われる。一方、「作業様相」、「ギャラリー小石原」および「動物」は女性の方が多い。女性は作陶を客観視できて、意識しやすいためと思われる。また、婦人会の緑化運動が鹿の被害にあっているため、「動物」に関心が高いと考えられる。

年齢では 10～30 代と 40～70 代の比較をする(図-7 $p < 5\%$)。「宗教設備」、「木」、「動物」、「作業様相」、「装飾」、「焼き物」および「遊具」について、両世代に有意な差が見られた。「装飾」、「焼き物」および「遊具」に関しては 10～30 代で多く、「宗教設備」、「木」、「動物」および「作業様相」は 40～70 代の方が多い。若年層は即物的であり、高齢層はその背後の基盤に関心が高いことが推量される。



* $p < 5\%$ ** $p < 1\%$

図-7 主対象と年齢

4. まとめ

本研究では、「写真投影法」を用いて東峰村小石原皿山地区の景観分析を行い、主対象とその評価を検討した。得られた結果を整理すると以下のようになる。

- 1) 「道」、「サイン」など、来訪者の誘導に関心が高い。後者に対しては必ずしも満足していない。
- 2) 「場所・皿山」に肯定的な意見が多く、住民の皿山地区に対する愛着の高さが伺える。
- 3) 自然の要素に対して肯定的であるが、「川」と「動物」に対しては否定的である。
- 4) 若年層は即物的であり、高齢層はその背後の基盤に関心が高いことが推量される。

参考文献

- 1) 野田正彰：漂白される子供たち，情報センター出版局，1988。
- 2) 東峰村-OfficialWebSite-：http://www1.vill.toho.fukuoka.jp/. 2014. 1.
- 3) 濱田英里，豊岡広平，丸谷耕太，内山忠，山下三平：北部九州における窯業の現状とそれに基づく景観の意義，土木学会西部支部研究発表会，2014。